

第2回総合戦略推進会議 議事要旨

1. 日 時 平成27年6月29日（月）18時30分～21時00分

2. 場 所 市役所10階 第6会議室

3. 出席者 計27名（有識者11名及び関係部長16名）

4. 議事内容報告

1 開会

※出席者自己紹介（前回欠席者）

2 議題

（1）人口動態の現状等について

※「北海道人口ビジョン（骨子）」について水口委員より情報提供

※事務局より帯広市の人口の現状等について説明

（主な質問・意見）

○出産時の高齢化について、女性の社会進出との因果関係はあるのか。

→必ずしも一律の相関があるとは思わないが、女性が就業するには、育児・出産の制度がある程度求められるものと考えている。

○人口減少には自然動態と社会動態があるが、まずは税収を確保するという観点で、働く場の確保や、企業の収益を上げることを主眼とする必要があると感じた。

（2）これまでの主な施策と〈〈今後に向けた視点〉〉について

※事務局より、「しごとの創出」「ひとの流れ」「結婚・出産・子育て」「安心安全なまち」の4点に基づき、予め有識者委員から提出された意見のほか、帯広市のこれまでの取り組みや成果、課題について説明

（主な質問・意見）

【しごとの創出】

○大規模農業について、国内で比較すれば大規模ではあるが、海外と比べるとそうではなく、コスト競争では勝てない。大規模を強み・メリットとする際に、捉え方を間違えないようにする必要がある。

○食関連の企業・研究機関の集積について、研究機関はあるが企業はどうか。農業者から商品開発の相談があっても地域に紹介できるところはない。大規模な

企業や零細企業はあると思うが、中堅どころが少ないのではないか。

- 今後に向けた視点を共有して、取り組む主体は誰なのかという点、民間でなくてはならない。また、近隣3町との間で人口が増えた減ったと議論しても仕方がない。周辺も自治体も巻き込んで議論をしていく方が良い。
 - 現状、帯広の農家は減少傾向にあり、残ったところが大規模化してきている。従って、繁忙期に一時的に就業してもらうような形の雇用はあるが、継続的な雇用に繋がるかは微妙なところ。
 - 六次産業化は新たな雇用を生み出すことができるもの。民間が主体となって地場農畜産物を使った取り組みが進んでいけばと思う。
 - 行政は民間と別の部分で関与するもの。行政はマッチングやコーディネートなど進めていければと思う。
 - 十勝・帯広は開業率が低いようだが、図書館でビジネス支援を行う取り組みなど海外では事例がある。こうした視点も検討して欲しい。
- ※このほか、水口委員より道内の人口流出の少ない自治体の特徴について情報提供があった

【ひとの流れ】

- ふるさとに関する教育・学習活動について、これまでも地域の訪問や事業者による講演などを通じて地域への理解の促進などに取り組んでいる。この4月に新たな給食センターができ、帯広産小麦の活用など、子どもたちが地域に誇りや愛着を持てるよう、着実に取り組みを進めていければと思う。
→子どもたちが体で地域の良さや美味しさを味わえる学習活動が必要と思う。
- 魅力発信について、高校生や若者が進学や就職でこの地域を離れ、その人たちが転出先で帯広の良さを伝えることができているか疑問がある。こうしたところから魅力発信を行っていかないと、長い目で見るときに上手くいかないのではないか。
- 十勝の農家は豊かであると感じており、農業に関わりたいと考えている都会の人にとっては魅力的であると思うのだが、十勝の農業は本当に人口の吸収力がないのか疑問である。
- 移住してくる人は、いきなり住みたい市町村に移住する場合もあれば、最初はその地域の中核都市に移住して、様子を見るという場合もある。十勝の場合、それは帯広周辺になると思うし、雇用も帯広周辺に集中している。十勝の町村は、そのことを認識したうえで、仕事は帯広周辺、住んでもらうためにはうち、といった移住施策を打ち出した方が良い。

【結婚・出産・子育て】

- 出産・子育てについて、中小企業は余裕人員を確保できず、産休や育休をあげたくてもあげられない。企業側も努力が必要だが、企業が産休や育休制度をしっかり整備できるような仕組みづくりを行政と民間が一緒になって検討して必要がある。

【安心安全なまち】

- 高齢化のスピードが上がってきていることを意識する必要がある。また、2040年に向けて高齢者人口は増え続け、特に2030年以降は75歳以上の増加が顕著になると予想される。こうした数字を把握したうえで、高齢化社会に対応しなくてはならない。
- 専門職の確保もそうだが、地域で高齢者が高齢者を支える仕組みづくりが必要。
- 高齢者の方は地域で色々な活動をしている印象があるが、若い人と高齢者の交流が少なく、地域で子どもを育てる母親が、何かあったときに隣の高齢者に子どもを預かってもらうといったことがなくなった。地域の活性化のために、タテとヨコの両方の交流を行っていききたい。
- どの町内会も高齢者から高齢者に引継ぎが行われている。新しい人に地域の一員であるという認識を持ってもらい、どうやって仲間に入れていくか考えるべき。一方、アクティブシニアの動きは活発であるから、それはちゃんと活用してまちづくりを進めていく必要がある。

(3) その他

※今回で退任となる委員から挨拶

以上